進路ジャーナル

第 111 号
令和元年７月19日
編集発行
磐城桜が丘高等学校
進路指導部
印刷 ㈱ネクスト情報はましん

夏の陣を制する
～受験における「戦い」～

進路指導主事　今村　義泰

あえて言おう。「受験は戦い」である。

人生には勝負しなければならない時がある。自らの理想を実現するためには様々な困難や障害の克服が求められる。受験は確かに他との競い合いではあるが、本質的には自身の理想を追い求めるための戦いである。自分との戦い、それこそが真の勝負である。

また、「受験は団体戦」でもある。友人同士で、クラスで、学年・学校全体で励まし合いながら受験に向かう姿勢は大切である。実際、士気の高いクラスほど受験結果は良い。それぞれの目標達成を目指して切磋琢磨し合える雰囲気作りが重要になってくる。受験という「戦場」で勝つか負けるか―合格か不合格か―の戦いを繰り広げることは誇らしい。しかし、最終的な問題は自身が合格できるかどうかに尽きる。

夏休みは来るべき個人の戦いに備えるための鍛錬の時間が保障されている。自らの実力養成に専念することができる。勝つための技量を磨くのは今である。受験における学校の勝利は、一人一人の勝利の上に成り立つものでなければならない。一人たりとも団体戦の中で犠牲となる無名の戦士になってはならない。

来年の夏は東京五輪が開催される。オリンピックに出場する選手たちは、来年に向けて全ての力を注いで日々鍛錬しているはずである。受験生が見習うべきはそうした彼らの精神力である。この夏は五輪戦士と同じ精神力を持って己の戦いに没頭してくれることを期待する。一人一人が来春に栄光の金メダルを手にするために。

【夏を制するための取り組み】

○三年生

一　志望校・受験方法の決定

目標がなければ何も始まらない。将来の姿をいったん明確にする。保護者や担任の意見にも耳を傾けることが重要。ただし、最後は自分で決断する。なお推薦入試の希望は必ず面談で申し出て相談をする。AO入試は8月1日からの出願が多いので、急がなければ間に合わない。

二　合格に必要な学力の確認

模試結果等を参考に、現段階の自分の実力を教科ごとに知る。特に弱点分野の把握が不可欠。また志望校の過去問を実際に解いて、合格するにはどんな力がどれだけ必要なのか体感することも重要。

三　学習方法と学習計画の決定

これから学習する内容を自分でできること、課外で習った方が良いこと、さらに先生から個人指導を受ける必要があることに分類する。計画はあくまで計画だと割り切り、無理をせず一週間ごとに見直すことで効率が上がる。

四　量と質の両立

学習時間だけを自慢するのは伺の意味もないが、多くの生徒はこれまでの累積時間が圧倒的に足りないのも事実。「身に付いた」と実感できる学習を毎日限界まで続けることが大切。夏に頑張ると、半年後の直前期に「夏はあれだけ頑張れたじゃないか」と踏ん張りが効くようになる。とにかく今は諦めない！

○一・二年生

一　志望学部・志望校の熟考

夏休みは各教科の課題も多く部活動も新人戦やコンクールを控え多忙な日々が予想される。その中で進路を考えるゆとりはなかなかないかもしれないが、二年生は模試で志望校を書き始める今が目標を具体化する最大のチャンスと言っていい。一年生も文理選択が終わって大学や職業についての考えを深める良い時期である。効果的なのはオープンキャンパス。時間を作って二校でも多く参加してほしい。必ずモチベーションが上がる。

二　苦手教科への挑戦

一、二年生を問わず夏休みに取り組むべき最大の学習課題。苦手教科を放置して三年生になってしまうことが最後に進路変更をする一番の原因。苦手な分野や単元を重点的に学習できるのはある程度まとまった時間が取れる今しかない。本校生は日頃から学習時間の少なさが一番の問題となっている。「三年生になると遊べないから今のうちに」と思った時点ですでに負けている。

三　読書や体験活動

三年生はとにかく時間がない。今から日々の読書はもちろんのこと、医療や福祉等の体験活動やボランティア活動に積極的に参加して幅広い経験を積んでほしい。推薦やAO入試を考えているなら戦略的にも不可欠。三年生になってからの付け焼き刃の知識では絶対に通用しない。

勝敗を分ける要因は多々あるが、最終的には自分自身の力を信じて戦い切れるかどうかに懸かっている。実力は努力の積み重ねによって身に付く。信じられる自分を確立できる夏となることを大いに期待している。

「二刀流の勧め」

校長　比佐　功

二刀流というと皆さん何を思い浮かべるだろうか。身近なところでは、野球の大谷翔平選手でしょうか。大谷選手は、少年時代から投手と打者の能力を生かし活躍してきました。高校野球ぐらいまでは、エースで4番という選手も多いと思いますが、大学野球やプロ野球選手になると、投手か打者（野手）を選択していくことが多ようです。大谷選手の場合は、日本のプロ野球に進んだ時には、「二刀流賛成派」「投手専念派」「打者専念派」など、野球専門家からもいろいろな意見がありました。しかし、その両方の能力を高いレベルで発揮し、日本ハムのリーグ優勝に貢献し、本場アメリカのメジャーリーグ、ロサンゼルス・エンゼルスでも活躍する快挙を成し遂げています。

日本では、昔から何か一つのことに専心し、能力を磨きそしてそれを生かすことがすばらしいと受け止められてきたように感じます。「器用貧乏」という言葉があります、何でも器用にこなすことができるよりは、何か一つに秀でていることの方が賞賛されてきた面があると思います。

また、江戸時代初期に宮本武蔵（1584～1645）という剣豪がいました。彼は、剣術家、兵法家、芸術家で二刀を用いる二天一流兵法の開祖であり、自著「五輪書」は二天一流について書き残したものですが、勝つということへの合理性は現代のビジネス社会にも通じるものとして外国語にも翻訳されています。その中で、武蔵は二刀流を使う理由として、一つに「持っている手段（二刀）をあますところなく活用すること。」二つに「左手も右手も同様に機能を果たすこと。」三つに「一つより二つのほうが有利であること。」を上げています。

少し趣は変わりますが、ハイブリッドという言葉が、最近の社会に聞かれるようになってきました。もともとは「種や品種が異なる植物や動物から生まれた子孫。二つの要素を組み合わせて作られたひとつのもの」という意味があるそうですが、電子工学やIT・放送技術・動力・システム工学などでその技術が活用されてきています。一例としては、エンジンとモーターを組み合わせた自動車がありますが、それぞれの特性を生かし補完しあいながら、一つの製品の能力や価値を高めているということです。

さて、これからの時代を生きる皆さんにとって、磨くべき能力といったものは何でしょうか。職業選択を見据えた進路の選択にあっても、そのことは重要な意味を持つものだと思います。人工知能（AI）、ビッグデータ、IoT（Internet of Things）、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会に取り入れられるSociety5.0では、社会の在り方そのものが「非連続的」といえるほど劇的に変化するといわれています。そのような中で創出される新たなサービスやビジネスで生活は便利で快適になっていくことが予想される反面、急激な変化に対しての不安や不透明さが心配されます。そのような社会において共通して求められる力は、①文章や情報を正確に読み解き対話する力。②科学的に思考・吟味し活用する力。③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力。であり新たな社会を牽引する人材として、①技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・想像する人材。②技術革新と社会課題をつなげ、プラットフォームを創造する人材。③様々な分野においてAIやデータの力を最大限活用し展開できる人材等が望まれております。そのために、様々な学問分野において必要となる、確立・統計や基礎的なプログラミング、理科と社会科の基礎的分野の力を身に着ける必要があり、これまでの文系や理系といった垣根を越えた双方の能力を備えることが大変重要になってくるといわれています。更には、地域の良さを理解しコミュニティを支えることのできる人材も重要とされていますので、例えば地域の福祉や農林水産、観光などに関心を向けていくことも大切な視点であると考えられます。

皆さんは、変化の見通せない社会を見据えた進路選択をしていかなければなりませんから、あらゆる可能性から自分の興味・関心や資質に合ったものを探し出し磨いていくことが大切です。そして、ひとつだけでなく複数の社会に通用するような力を身に着けていくことが肝要なのではないかと思います。これから選択していく専門的な学識だけではなく、仕事に生かせる資格のような強みを持つことも考えられます。「手に職」という言葉がありますが、職業に生かせる価値ある資格を身に着けておくことは、職業選択の視野や人生を豊かに生きることなどにもつながると思います。二刀流とは言わず、社会に太刀打ちできる、多様な能力を身に着けた人材に成長できるよう頑張ってください。

筑波大学訪問

二学年主任　豊田　浩美

五月二十一日（火）荒天の中、今後の学習に対する意欲の向上を図り、難関国公立大学へチャレンジする心を育むことを目的として、二学年生徒全員で筑波大学を訪問した。

到着後直ちに七講座に分かれて、約一時間にわたる「模擬講義」を受講した。日本語、英語、途上国支援活動、都市空間、知的制御、元素語呂、光エネルギーなどのさまざまなテーマのもとに講義が展開され、難関国立大学の高度な学問の一端に触れることができたと感じた。

引き続き「全体会」では、筑波大学アドミッションセンターの先生より、「大学概要説明ならびに新しい大学入試制度」についてのお話をうかがった。新しい入試に向けて、様々な情報を取捨選択しながら頑張って行こう！という意気込みが、少しずつではあるが生徒たちから伝わってきたように思う。

その後「学内散策及び昼食」となり、スタバに行く者や学食で食事を摂る者、買物をする者など、大学の雰囲気を楽しんだようである。学食では、多くの留学生たちが多様な言葉を駆使して会話をしている姿が印象的であった。また、晴天であれば実感できたであろうキャンパス内の広大さを満喫できなかったことは心残りであった。

午後からは各研究機関や施設ごとに分かれて「施設見学」を行った。学内では、図書館やプラズマ研究センター、アイソトープ環境動態研究センターなど学問を追求するための施設を直に見学し、総合大学の魅力を肌で感じることができた。JAXAなど学園都市内の施設見学も、生憎の雨の中ではあったが十分に堪能した様子であった。

今回の経験を基にこれから各大学で実施されるオープンキャンパス等に参加し、自分の希望進路の実現に向けて努力を続けてほしいと考える。またこの行事が、各自の進路選択の一助となってくれることを切に願っている。

施設見学一覧

1	中央図書館
2	国立公文書館
3	地図と測量の科学館
4	つくばサイエンススクエア
5	ＪＡＸＡ
6	プラズマ研究センター
7	アイソトープ環境動態研究センター放射線研究部門

模擬講義題・講師一覧

1	「日本語の美しさ」　湯沢　質幸　（ゆざわ　ただゆき）　先生
2	「英語を楽しく学ぶために」　藤原　保明（ふじわら　やすあき）　先生
3	「途上国支援活動の学際的考察：ラオス少数民族との交流」　松田　紀之（まつだ　のりゆき）先生
4	「都市空間とは何か」　腰塚　武志（こしづか　たけし）先生
5	「生活を快適に支える知的制御」　安信　誠二（やすのぶ　せいじ）先生
6	「元素講話　－ 今年は国際周期表年 －」　大嶋　建一（おおしま　けんいち）先生
7	「光エネルギーと化学」　新井　達郎（あらい　たつお）先生

生徒感想文

二年一組　太田　愛香

筑波大学を実際に訪問し、講義を一時間受けてみて、大学というものは、自分が学びたい、知りたい、研究したいと思うものがあるからこそ、その大学にしかない魅力に気づき入ることが大事だと思いました。〝高校生までに学ぶものは決まっていても、大学からは先生が研究されて分かったことを学生が学ぶ〟これは、高校まで大学の大きな違いであり、自分が行きたいと思う大学を探す（注目する）べき点の一つだと思いました。

私はこれからもっと詳しいところまで大学を調べようと思いました。その大学の先生がどんな研究をしているのかまで調べれば、自分が学びたい、知りたいところだと知れるし、将来なりたい仕事になるための一歩になると思うからです。また、自分の行きたい大学に行けるようにするためにも日頃から勉強することはとても大事だと感じました。

毎日の予習、復習と授業をきちんと取り組み、どんな大学を目指そうともたちうちできるような学力を身につけようと思いました。大学に実際に行き雰囲気をつかむことも大事なので、オープンキャンパスに参加してみようと思います。

二年二組　橋本　陽和

標準語が誰にでもあてはまる心地好い音だと思っていましたが、講義を聞いて、そうではないかもしれないと思ったし、実際に今までも少し違和感を感じていたかもしれないと、振り返ることができました。私は個人的に「訛言葉」が好きで綺麗だなと感じていて、一方で、東北や北関東あたりでよく聞かれるような濁点のつく方言があまり好きではありませんでした。しかし、馴染みのある方言といわれれば後者であり、自然と使っているなと改めて実感しました。〝言葉〟が人間の表現によって印象によって本来の意味や美しさ、独特な雰囲気が失われているのかもしれないと思うことができました。今回の講義で、方言や日本語そのものに対する印象が大きく変わりました。もっと色々な方言に触れてみたいという想いが強くなりました。

二年三組　鈴木　杏

都市開発には、様々な沢山の人たちが協力し合って今の日本のような充実した都市があるのだと実感した。講義の先生も実際、都市開発にたずさわっていて、とても生き生きとして、楽しそうな仕事だと思った。

勉強だけではなく、礼儀もちゃんとしなければならないと教わった。理解を感覚まで深めることが大切と教わり、確かにそうだと思った。そして、自分自身で新しいことを切り開き、様々なものと出会い感動していこうと思った。

二年五組　高野　雄都

私たちが今こうして生活していられるのは、先人の方々の未知への探求心によるものであり、それを多岐多様に我々が役立てているからである。そして、より機能性の高い物質の開発のためにはさらなる科学技術の進歩と共に、数学と理科の基礎学力が要されます。それだけではなく、発想の転換（平面的→多面的、見えないものを見ようとすること）こそが重要だということを今回の模擬講義を通して経験しました。大学ではこのような視点が重点だと知りました。

二年六組　大森　花歩

今回の体験で、私は、学ぶことの大切さに気づいた。講義の内容ももちろんそうですが、受験制度を聞いた時が一番でした。正直、今、大学生になっている自分が想像できず、とてもくるしいです。筑波大学で、実際に大学の雰囲気を感じて、大学生になりたいと改めて思いました。今、勉強をあきらめたら大学生にはなれないので、三年間学ぶことの大切さに気づいたと思いました。あたり前のことですが、自分の中で、再確認できて、本当に良かったと思っています。私は、数学の先生になりたいという夢があります。その夢をかなえるために、たくさん勉強します。具体的には、行きたい大学についてくわしく調べ、苦手分野をなくし、今回学んだ、学ぶことの大切さをわすれずに日々すごしていきたいです。今回の体験は、大学入試を受ける前に、気づくべきことを、きちんと気づけたので、とても良かったです。

二年七組　船生　心晴

筑波大学訪問の中で、新たな分野のことを初めて知ることができたり、大学訪問時にどういった点に注目したら良いかなど、得られることがとても多かった訪問となったと思った。大学内の施設を見たり、学食に行ってみたり、いろいろな所を見ていくことで、大学内の雰囲気もつかむことができて、他の大学ともまた違った雰囲気の大学訪問となり、違いが感じられて面白い訪問でした。午後の施設訪問についても、科学技術の活用のされ方や、今までの技術の進歩の歴史など興味深いことを多く知ることができました。

これからは具体的に進路を固めていくために、志望校を決めていきたいと思いますが、その時には、今回得られたこと、学んだ知識を活かして、調べ学習を充実させたり、オープンキャンパスに行ってみたりなどして、今までよりも濃い内容で、大学について検討していきたいと思います。